邊陬道路改良の一瞥

溪流潺湲夏は香魚の縱横に游泳するを覗ひ、冬は水禽の淵に浮むを望む、山紫水明の境とだに聞けば、自ら塵外の感を覺ゆるけれども、元來この溪流なるものが交通經濟の上には、頗る障碍を爲すものである、勿論、江河の汎濫も交通上大支障には相違ないが、他にまた舟楫の便を有つから大いに補ふ所がある、然るに溪流となると瀨となり淵となりを繰返して流れるので舟行がきかない大抵は左に折れ、右に曲り谿に沿ふて村落をなすから、村の地勢は自然長い形となるではあるが、其の交通上の障碍を避くるために、一村に三つも架橋を要するといふにあつては、事實上容易ならぬことである。

夏の半ばから秋の末に至るまで數次の洪水は、斯樣な村の人々には大なる脅威であり、また大なる艱みである、それは耕地面が少なく、米穀の自給が出來ないから下流地方から、移入するのが常態である。そこで一朝交通の杜絶に遭へば、忽ち食糧の缺乏で、無いもの相場と承知しつゝも、止むなく高價を拂ふて急を凌ぐのである。

橋の普請は村掛りで夫々最寄部落が受持つてかけるが夏の半ばに落ちた本橋は、秋の末まで架からない、其間は假橋で過ごすのを通例とする其の假橋といふものも頗る危うけなもので、丸太の橋脚桁拔きで厚板ばかり渡し竹の手掛位で間に合すから、米穀其の他の荷物を運ぶときは、馬背なり手車なりから卸して、簡々に渡し、馬は徒渉させ、車は人手で扛げて通さなければならぬ。老人、小供の通行にも、餘程氣遣はるゝものである。ある夏のこと、此の村のお祭りに隣村の婦人が子供を連れて、親戚に客とならふとして、例の假橋を渡りかけた、其の位置が大概川の瀨の邊りであるから、流れは急流奔湍で、橋板は上下動とあるから、不慣なものには險呑千萬である、子供は足もとの速瀨に眼が眩み、橋板の動搖に調子を失つて瀨に流れた、母親は駭いて跡を追つた、子供の方は岸に居た人に拯はれたが、母親は其下流の淵に捲かれて終ひに溺れたといふ悲慘な事實もあつた。

星移り物變はり村普請の橋は何時か縣の管理になつて、以

前より氣のきいた橋がかかつたけれども、之れも洪水の都度川の勇者が受負つて橋板を取り外し、減水をまつては復舊をするといふ仕組であるから、餘程煩雜なものであつた。其處で縣では增水量の試しに基いて、是迄にない高位の橋脚に流木よけ迄添へた、邊陬には稀に見る橋をかけられた。村の人もこれでこそはと交通の安全を信じた。然るに其の翌年の洪水は其の高位をも凌ぐばかりの水量で、流木は心太を撞くやうに流れ河石は砲彈の障壁を碎くやうに流轉して喧しく鳴つて、邑人の頼みに念つた流石の橋も、一と堪りもなく麥稈を掃ふやうに流失して終つた、それで復も此の村の交通は元の默阿彌に歸つた。

此の樣な橋が其後も架けられたが、矢張永持ちはなかつた。それから幾星霜か經て、這度は太い鐵線を幾條となく撚り合せた綱に釣られた橋が出來て、始めて洪水の難から免かれることが出來た。今は其の橋を自動車迄も馳走するやうになつたから、人々は隔世の盛ありといふけれども、此に至るまでは、實に四十余年を經て居る。

我邦は大正八年に道路法が布かれて、それに伴ふ色々の道路政策が樹てられたから、吾々は頗る會心の事に思つた、道路は逐年急速度で改良せらるゝことゝ思つた、所が其の實施は動もすれば時の政局により、又は其の他の事情によつて、吾々の期待を裏切るものがあるのは甚だ遺憾なことである、而して其の行艱みは結局財力の乏しいのに由るといふに歸するやうだが、道路のやうな廣汎なる生產助勢の設備は、思ひ切つて借金支辨で勇猛に進行して可然ものと思ふ。

一つの橋の改善に、二十年三十年四十年五十年といふ長がい歲月を假さねばならぬとあつては、國富の伸長果して何れの日にか期すべきやの嘆を抱かざるを得ぬ次第で、そこで橋の變遷を物語る次第である。

（ぬけから）